冷凍

「ママ、そろそろ肉と飲み物とかクーラーボックスに詰めちゃって」と一声かけてミニバンの荷台に乗り込む。うまく積まないと積みきれなくなる。毎回苦戦するが、今回は頭の中でシミュレーションしてきたので自信がある。クーラーボックスやらバーベキューコンロなどを手際よく積んでいく。キャンプを初めて数年、もう何回行っただろうか、随分コツもわかってきた。「ちょっと重いから手伝って」と妻がクーラーボックスを運んできた。それを受け取り、「子供たち起こして。あと３０分で出発するよ」。

予定より少し遅れて自宅を出発した。もう夏休みも終盤、今年は仕事も忙しくどこにも連れて行けなかった。ようやく最後に休みが取れ父親としての面目を保てた。車の中は電子音がずっと響いている。子供たちはコンピューターゲームに夢中だ。よく飽きもせずそんなにやれるなと不思議に思う。妻は朝もっていく食材の仕込みがあったので既にぐっすりお休み中。私は子供たちに遠慮がちにCDの音量を下げてセットした。その時「パリッ」と何かがはじける音がした。うん？あれ荷台の荷物がずれた？クーラーボックスの中かな？特にルームミラー越しには変わった様子はない。キャンプ地最寄りの高速道路出口が近づいていた。

到着したキャンプ場は夏休み終盤ということもあり、人影もまばらだ。休む暇なくテントの設営。子供たちもテンション高めではしゃいでいる。テントのペグ打ちを手伝わせながらあと何回一緒にできるのかなと思った。上の女の子は小学校６年生、虫がいて嫌だとかテントよりホテルのほうが良かったなぁと言い出している。あんなにキャンプやりたいと言っていたのは娘なのにと思いながら作業を続ける。弟は小学校３年生、まさに好奇心のかたまり、さっきから姿が見えない。妻に目を離さないように言いながらようやく準備が整った。

いよいよバーベキュー開始である。そしていつも苦戦するのが炭おこしだ。どうも炭の積み方が悪いのか風の送り方が悪いのか、うまくいかないときのほうが多い。ここで子供たちは待ちくたびれていつもブーイングされてしまうのだ。今日は随分研究してきたし、遠目でほかの家族連れの炭おこしなんかをちらちら見ながら火加減を調節する。いい感じだ。「パリッ」炭がはぜた。「炭いい感じだよ。肉焼くよ！」。

ここのところ定番のカレーが多かったが今日は焼肉だ。ステーキ肉を奮発し、ソーセージや海鮮類も買ってきた。地元野菜も調達し、豪華なキャンプ飯となった。ひと通り食べ終わると、仕事で帰りも遅く子どもたちとゆっくり話せると楽しみにしていたが、あれ、気がつくといない。どこに行ったのかと思っていると、あの行きの車の中でいやというほ

ど聞かされた電子音が聞こえている。そう、テントの中で寝ころびながらゲームに没頭中。これじゃキャンプにきた意味ないじゃないかと苦笑する。
　妻がクーラーボックスをガサゴソ。「みんなーアイスよ」なるほどアイスには弱いのか。子供たちが急いでテントから出てくる。お目当てのアイスをとられまいとして姉が
「ちょっと私が先」。妻から「あなた6年生でしょ」とたしなめられ、少しいじけている。妻が早く花火に移ってと私に目くばせ、慌てて私は「さぁ花火やろうか」。
我が家のキャンプの最後は消えかかった炭を火種に花火をするのが恒例だ。手持ち花火をいくつか用意してきた。そして一番最後は線香花火で締める。
子供たちとこうやってワイワイ言いながら花火をできることに少し感慨を覚えていると脇では再び子供たちが花火の取り合い小競り合い。せっかくいい気分に浸っていたのに台無しだ。妻の仲裁でどうやらおさまり花火が始まった。娘はアイスで怒られ、花火の取り合いでも怒られ、「パパこれやって」「パパ火つけて」と私のところへ寄ってくる。
　花火もいよいよ線香花火だけになった。みんな線香花火の最後まで粘るオレンジの火の粒が落ちないよう息をひそめて見つめている。「パリッ」、その音と同時に私の火の粒が落ちてしまった。結局それを合図に皆の線香花火も終わってしまった。
　子供たちは今日1日興奮していたからだろう、ゲーム機片手にあっという間に寝落ちしてしまった。そしてその脇で妻もぐぅぐぅおやすみだ。
では1人でちょっとだけ飲むかと、持ってきたウィスキーに溶けかけの氷を入れた。氷がひときわ大きく「パリッ」と鳴った。
あたりは都会とは違う濃い闇に包まれていた。

気が付くと私は天井を見ていた。

「パパ、今のが最後の冷凍よ」
「ありがとう。楽しかった」

妻は静かに冷凍パックの包みをベッド脇に置いた。パックのラベルは2010年8月26日、27日　キャンプ　と書かれていた。